

俳優・歌手

山崎育二郎氏



一歩踏み出す勇気を持って
可能性を切り拓き、
挑戦し続ける

12歳でミュージカルと出会い、「自分らしくいられる世界を見つけた」と語る山崎育二郎氏。20代で数々の名作を経験してミュージカル俳優としての地位を確立し、近年はテレビ、映画、音楽活動など活躍の場を広げています。今年の会長対談は、お父様が日本製鉄OBである山崎氏をお招きして、ミュージカルに軸足を置き、さまざまなエンターテインメントに挑戦されるようになった経緯や、日本製鉄の社宅に住んでおられたころの思い出、これからの抱負と社員へのメッセージをいただきました。

進藤 孝生

日本製鉄(株) 代表取締役会長(対談時)



■プロフィール やまざき・いくさぶろう

1986年東京都生まれ。俳優、歌手。幼少期に観たミュージカル『アニー』に衝撃を受け、小学3年生から歌のレッスンを始める。12歳のときアルゴミュージカル『フラワー』の主演に抜擢され、ミュージカルデビュー。その後ピアノのレッスンを受けて音楽大学附属高校に入り、在学中にアメリカ留学。帰国後、音楽大学に入学し、在学中にマリウス役に抜擢された『レ・ミゼラブル』以降、『モーツァルト!』や『ミス・サイゴン』『エリザベト』など数多くのミュージカルに出演。近年は活動の幅を映像にも広げ、日曜劇場『下町ロケット』で注目を浴び、バラエティ番組でも飾らないキャラクターが人気を集めている。2020年に出演したNHK朝の連続テレビ小説『エール』で歌った縁から、21、23年の全国高等学校野球選手権大会初日に、大会歌『栄冠は君に輝く』を歌う。21年、『青天を衝け』でNHK大河ドラマに初出演(伊藤博文役)。24年1月からは、ミュージカル『トッツィー』で主演マイケル・ドーシー/ドロシー・マイケルズを演じている。また5月からは、全国TOUR『THE HANDSOME』を全国27カ所30公演予定している。

役を通して自分を表現できる ミュージカルの世界へ

進藤 今年はミュージカル俳優として数々の名舞台に立ち、テレビドラマや司会、さらにミュージシャンと、幅広く活躍されている山崎育二郎さんをお迎えしました。山崎さんのお父様は日本製鉄のOBで私自身、大変お世話になりました。

日本製鉄社員をはじめ、若い世代は仕事や生活でいろいろな壁につき当たることがありますが、山崎さんご自身のこれまでのご経験をお聞かせいただくことで、そうした若い世代への「エール」になればと思います。初めに、子ども時代からアメリカに留学される前までの歩みを教えていただけますか。

山崎 幼少期は、やっと友だちができて仲良くなったと思ったら、名古屋、広畑、君津と父の転勤で転校しなければならなくて当時は嫌でした。私は4人兄弟の三男ですが、兄弟のなかでも特におとなしく、人前が苦手で引込み思案でした。

進藤 辛い思いをさせてしまい申し訳ありません(笑)。お母様は音楽教師で、小さいころから音楽に触れる機会が多かったようですね。

山崎 母が家でピアノやギターを弾き、歌も歌っていて、物心ついたころから周りに音楽がありました。また、私がいつもモジモジしているのを母が心配して、家族でコンサートや宝塚ミュージカルなどを観に行きました。兄弟のなかで自分だけがそれに反応して、ミュージカル『アニー』のCDをねだって買ってもらい、それを家で聴きながらずっと歌っていました。

進藤 全国童謡歌唱コンクールで優勝したり、子どもころからミュージカルに出演されるきっかけは



野球少年でもあった小学生時代

あったのですか。

山崎 母が私の歌声を聴いて声質も良いし、歌うことで自信がつけばと思い、小学3年生から近所の音楽教室に通い始めてコンクールに出場するようになりました。そこで童謡『七つの子』を歌って審査員特別賞をいただき、それが学校でも知られて、音楽の授業で歌ったら皆に喜んでもらえた。歌う



ミュージカル初舞台となった『フラワー』(小学6年生)

ときだけは何故か緊張せずに自信が持てました。その後、6年生のときに音楽教室の方から勧められて、約3000人の子役が集まるオーディションで、運良く

アルゴミュージカル(※『フラワー』)の主演に選ばれました。

進藤 歌が素晴らしくても、ミュージカルでは芝居やダンスもあります。大変ではありませんでしたか。

山崎 すでに他で主役を経験したり、バレエを習っているような天才子役が集まるなかに主役として入り、稽古期間中は演出の先生から「下手くそ、帰れ!」と毎日怒られていました。きつい稽古を重ねて、なんとか形にしていたいた公演初日のカーテンコールで、1000人近いお客様から拍手をいただき、すごく感動して、こんな幸せな空間があるんだ、これをやっていきたいと思いました。山崎育二郎として人前に出るのは恥ずかしいけれど、役に入

※ アルゴミュージカル：シンガーソングライターの小椋佳氏が企画を担当し、1987年から2008年にかけて公演したジュニアミュージカル。

り込んで歌う、表現することは自分に向けていて、しつくりきました。

進藤 そこから音楽大学の附属高校に進まれ、在学中にアメリカに留学されました。どのような経緯があったのですか。

山崎 ミュージカルに出演しながらピアノや音楽理論などを学んでいた中学3年生のころ変声期を迎えて、歌が思うように歌えなくなりオーディションにも落ちる中途半端な状態になりました。唯一の自信であり、これでやっていくんだというときだったので、ものすごく落ち込みましたね。

そんな時期に、たまたまクラシックの音楽の先生との出会いがあり、「ブロードウェイやロンドンのミュージカル俳優はクラシックの基礎や歌い方を勉強する。それを勉強すれば絶対にプラスになるからやってみなにか」と言われ、一度ミュージカルの世界から離れて、イタリア歌曲やピアノをちゃんと勉強する期間をつくらうと思いい、音大の附属高校に進学しました。

積極的に挑戦する 姿勢と力を培ったアメリカ留学

進藤 高校在学中にアメリカに1年留学されました。以前テレビで、「アメリカで最初は周りに溶け込めず苦労したが、ダンスで一目置かれるようになった」というお話を聞きました。私も留学したとき、拙い英語力もあって悩んだ時期がありました。意外なところで周りが認めてくれた私自身の経験もあって共感しました。留学された経緯も含めて、アメリカでのエピソードを聞かせてください。

山崎 長兄は高校からアメリカに留学し、高校でラグビー部だった次兄もニュージーランドにラグビー留学し、バスケットボールの大会でアメリカ国歌を独唱させてもらったり、とにかく積極的にいこうと思えました。

進藤 一歩踏み出す勇気が大切ですね。私も留学時代、クラスで発言せずに成績がどんどん下がっていったときに、自分の得意科目で思い切って積極的に発言すると、拙い英語ながらもその発言内容を認めて褒めてくれる。アメリカ社会はそういう意味で良いものは良いと認める率直さがありますね。留学されたときの語学力はどうでしたか。

山崎 ほぼわからないまま行きましたが、3カ月ぐらい経つと向こうが言っていることがわかってくる。特に日本語に訳すわけでもなくその時の状況、空気感でだんだん理解できるようになります。あとは音やイントネーションで覚えます。相手が発する言葉の音を真似して喋っているうちに会話ができるようになっていました。

進藤 音楽家だから音で感じ取る能力が高いんですね。あとは若いと脳も柔らかく吸収も早い。私のように30歳ぐらいで行くと、言いたいことを頭の中で翻訳して英文をつくっているうちに会話の流れについていけなくなります(笑)。

映像とミュージカルの世界の 架け橋になる

進藤 高校卒業後は東京音楽大学に進学して声楽を学ばれ、1年生のときに子どものころからの目標だった『レ・ミゼラブル』で、久しぶりにミュージカルの世界に戻られました。ミュージカルで帝国劇場に立ち、同演目を含めて4作品に出るという目標を持たれていたんですね。

山崎 帝国劇場の『レ・ミゼラブル』では、2万人

ました。兄2人が海外にいて自分も興味があったのと、ミュージカルから離れた人生でいろいろなことを経験して勉強したいという思いで渡米しました。

進藤 ホームステイしたミズーリ州の留学先は日本人がまったくいない地域で、2000人生徒がいる高校でもアジア人は山崎さん1人だけだったそうですね。あえてそんな地域を選ばれたのは何故ですか。

山崎 長兄が「都会は日本人が多い。日本語で話す機会も多くて英語が身に付かないから田舎に行け」と。その分辛いことがあっても絶対にプラスになると言われて、大自然に囲まれたその地域を選びました。

でも登校初日は、アジア人が珍しいのか周りからジロジロ見られて、体格のいい男子生徒たちに囲まれて投げ飛ばされたり、毎日小ばかにされるだけでなく、頭を叩かれたり、本当にひどいですよ。萎縮してランチも1人で食べるような日が続いているうちに、シャイな自分が出てきた。でも長兄もこれを利用してやってきたのだから、自分も頑張らなければと思いました。

進藤 それが3カ月ぐらい続いたある日、ダンスパーティーのポスターを目にされたことがひとつの契機になったそうですね。

山崎 学校主催で行われるダンスパーティーのお知らせを見て、ミュージカルに出演してジャズダンスも踊れるしと思って1人で参加しました。盛り上がる曲になると学生500人ぐらいが円になって踊り、その中央で人気者やダンスの得意な子が1人で踊る。僕は端でそれを見ていたのですが、もしかしたら真ん中で踊ったら何か変わるんじゃないかと。度胸がなくて3曲ぐらい飛ばしたあと、最後に「行くしかない!」と覚悟を決めて、走って真ん中に立ったら周りの500人

の応募があるなかで5次審査まで進んで合格し、マリウス役でミュージカルの再デビューを果たせました。そこから『エリザベット』『モーツァルト』『ミス・サイゴン』という、自分が昔からずっとやりたかった東宝ミュージカルの代表作すべてに出演することができました。

進藤 その後、もともとテレビに出演する気持ちはなかったなかで、映像の世界にもチャレンジされましたが、きっかけはあるのですか。

山崎 しばらくはミュージカルにしか興味がなく、年間5本出演している時期もありましたが、東京の日比谷界隈だけ、特定の芸術領域だけで盛り上がっている感じがしました。世界を見るとブロードウェイやロンドンでは、ひとつの娯楽として映画を観る感覚で、食事後にミュージカルを観に行くといったことが一般的になっていて。もともと日本のミュージカル界を盛り上げたいという思いで、29歳のとき、映像・メディアに出てミュージカル界との架け橋のような存在になれたらと思いました。

進藤 映像の世界に飛び込まれて、『下町ロケット』出演後すぐに注目され、ドラマ出演が続きましたね。特に印象に残っている仕事はありますか。

山崎 テレビに出演し始めたときから目標にしていたのはNHK朝の連続テレビ小説と大河ドラマでした。近年、この2つに出演させていただいたのが印象深く、先ほどの架け橋という意味でも大きいですね。

進藤 私は2020年の連続テレビ小説『エール』のなかで山崎さんが歌われた古関裕而作曲の『栄冠は君に輝く』を、2023年の全国高校野球の開会式で実際に歌われた光景が大変印象に残っています。



アメリカ留学時代
(左写真の中央、上写真の中央下が山崎氏)



が静まりかえった。留学生のおとなしい奴がまさか、という感じです。こちらも出ちゃったからには踊るしかないと思ってジャズダンスやミュージカルのダンスを踊っていたら、「IKU!」と声があがって、全体でのコールになった。踊り終わったあとは皆が中央に集まってきた。「お前サイコーだった!」という感じで、その夜を境に一気にすべてが変わりました。その後は、野球や

山崎 僕自身、小学生時代ずっと野球をやっていた甲子園に立ちたかった思いや、演じた伊藤久男(役名…佐藤久志)さん(『栄冠は君に輝く』の歌手)も



マリウス役で出演した『レ・ミゼラブル』
写真提供: 東宝演劇部



黄泉の帝王・トートに扮した『エリザベット』
写真提供: 東宝演劇部



ではなく、演じているその人間が歌っているという感覚、役になりきれたというのがすごいと思うのですが、例えばモーツァルトを演じる時、その人の見た目だけでなく、考えや心の奥まで掘り下げる必要があると思います。山崎さんご自身は実際に経験していませんが、間接的ではありながら多くの人生を経験されているわけですよね。

山崎 子供のころは家族でよく都市対抗野球を観に行きました。「鉄の花がひらく〜」って兄弟全員で歌って応援しました。都市対抗野球はいつも楽しみでした。広畑の社宅に住んでいたときは近くに御社野球部の球場があってよく観に行きました。

クラシックを学ぶ音大生で、自分が生きてきた人生とすごくリンクする役柄だったこともあり、『エール』はとても感慨深いお仕事でした。『エール』への出演をきっかけに『紅白歌合戦』で『栄冠は君に輝く』を歌い、満席の甲子園球場に立つ球児たちの前で、高校の吹奏楽部や合唱部とのコラボで歌わせていただきました。夢のような瞬間でしたね。

演じるさまざまな人生が自分の成長の糧に

進藤 これまでさまざまな役を演じてこられて、先ほど触れられたように、山崎育三郎が歌っているの

感情になります。朝ドラで1年近く伊藤久男さんの役をやらせていただいたときも、戦争を経験して彼が歌えなくなってきたときの心情はどのようなものだったのか考え抜き、自分を追い込んでいくと、到底経験できないようなことを自分が経験したような感覚になります。

山崎 留学から帰国したとき父は室蘭、母は岡山、2人の兄はアメリカとニュージーランド、弟は香川で野球部の寮暮らしと、生活の場がバラバラだったので、僕が東京高輪の実家で脳梗塞の後遺症で介護が必要な祖父母と3人で生活することになりました。

高輪の地元の仲間2人がしょっちゅう家に来て祖母と一緒に食事して、ときには病院に連れて行ってくれるなど本当に助けてもらいました。その1人は今、御社の社員です(笑)。

山崎 子どものころは家族でよく都市対抗野球を観に行きました。「鉄の花がひらく〜」って兄弟全員で歌って応援しました。都市対抗野球はいつも楽しみでした。広畑の社宅に住んでいたときは近くに御社野球部の球場があってよく観に行きました。

進藤 そうした周りのサポートが得られるのも、山崎さんの人柄のなせる業だと思えますね。そうしたこともあって、介護生活も明るく捉えられているんだと感じました。

進藤 ここで少し日本製鉄についてお話ししたいと思えます。現在、山崎さんと同じ事務所の川口春奈さんを起用させていただき、幅広い世代の認知度向上に向けた施策として「世界は鉄でできていく」というメッセージを伝えるテレビCMを放映しています。背景として、日本が労働力不足経済に入るなかで若い世代が日本製鉄に興味を持ち、

小さいころに話を戻しますが、山崎さんはお父様が日本製鉄社員で社宅に住んでいたこともあと聞いていますが、日本製鉄にまつわる思い出はありますか。

入社を希望してくれるようになればという思いがあります。現在これだけ技術が進歩して社会が発展したなかでも、人間の生活の基礎素材として鉄に代わる素材はありません。そこに誇りを持って社員を育て、社員も一生懸命に仕事をしています。

また、カーボンニュートラルの世界的な流れのなかで生産工程で多くのCO₂を排出する鉄鋼業の使命として、CO₂の排出を削減する革新的製鉄プロセスや使用時の省CO₂につながる高機能鋼材の開発に力を注いでいます。さらには、製鉄副産物を使ってCO₂を吸収する藻場を再生させる「海の森づくり」に20年近く取り組みなど、カーボンニュートラルへの貢献を目指す日本製鉄の姿をもっと知ってもらいたいと思いい、これもCMのテーマにしています。



製鉄副産物による「海の森づくり」

日本発のミュージカル作品を世界に広めたい

進藤 山崎さんの今後の抱負について伺いたいと思います。ミュージカルを中心に活動されるなかで、他分野への挑戦や後進の指導など、考えられていることはありますか。

山崎 帝国劇場で『レ・ミゼラブル』や『エリザベト』『モーツァルト』など、憧れのブロードウェイやロンドン、ウイーンから来る海外のヒット作品をずっとやってきましたが、これからは世界に広げられる日本国産のミュージカル作品を生み出していかなければならないと考えています。お隣の韓国は映画、ドラマにしてもものすごくエンター



タテインが注目されています。さらには、製鉄副産物を使ってCO₂を吸収する藻場を再生させる「海の森づくり」に20年近く取り組みなど、カーボンニュートラルへの貢献を目指す日本製鉄の姿をもっと知ってもらいたいと思いい、これもCMのテーマにしています。



テイメント性が高く、ミュージカルにも多くのオリジナル作品があり、日本でも上演されています。幼少期にミュージカルデビューを果たした『フラワー』が小椋佳さんのオリジナル作品だったこともあり、日本で生まれる作品にこだわりたい気持ちは特に強いですね。いま映像の世界にいますが、日本発のミュージカルドラマや映画など、さまざまな形で日本の作品をつくって世界に広めていきたいと思っています。

進藤 確かに『ウエスト・サイド・ストーリー』や『サウンド・オブ・ミュージック』もアメリカから来たものです。海外から来た作品だと著作権も海外が持っているので、著作権料を払って経済的に回していく難しさがありますね。数カ月に及ぶロングラン公演をやらなければならないのはそうした事情もあると聞いています。

山崎 日本に著作権があればビジネスとしても成しやすしいし、若い子たちの育成にももっと力を入れられると思います。ニューヨークのプロデューサーの方が、ショービジネスで一番大きいのはミュージカルだと。ひとつ作品をつくってヒットしたら世界各国で長期にわたり上演される。『レ・ミゼラブル』も世界で30年以上のロングランです。そうしたこともあって、世界の投資家がブロードウェイの新作に投資し、質の高いヒット作品が生まれていくという流れがあります。

進藤 日本人はシャイで控えめな国民性もあって、海外作品ならまだしも日本人の物語のなかに歌やダンスを導入する難しさはあるかもしれませんね。ただ一方で、NHKのど自慢で、将来はミュージカル俳優になりたいという若者もけっこういて、日常

的にダンスや音楽が身近になっています。

山崎 かつて自分もそうでしたが、ミュージカルをやりたいと思ったときに何をしたらよいかわからない。歌やダンスなどを総合的に指導してもらえないスクールが少ないので、そうした育成基盤をつくれると良いですね。

進藤 発声法はクラシックの声乐と同じなんですよね。

山崎 そうですね。ただクラシックのオペラではマイクを使わず生声ですが、セリフもあるミュージカルではマイクを使うため、表現としてそれぞれ歌唱のアプローチが違うんです。ミュージカルを目指すのが良いと思うのは、歌とダンスと芝居すべてを勉強するので、どのエンターテインメントにも挑戦できます。

また、ミュージカル俳優は、舞台のアフタートークやディナーショーなど、お喋りしなきゃいけない時間が他の俳優よりも多い。お客様の層も、多様な作品を観て人生経験もされている大人の方なので、その皆さんに納得していただけるトークをずっと考えてきました。ドラマや音楽、司会など今の活動のベースはすべてミュージカルなんです。

紀尾井ホールは観客と一体となれる貴重な空間

進藤 本日はこの対談の前に紀尾井ホールを見学いただきました。日本製鉄では1995年に音楽文化支援の拠点としてこのホールを開館しました。洋楽専用ホール（収容人数800人）と邦楽専用ホールがあり、洋楽専用ホールはクラシック音楽、特に室内楽に適した空間となっており、質の高いコンサートホールとして国内外から高い評価を得ていま

お客様をきちんと感じられる距離感が素晴らしいと思いました。日本はサントリーホールをはじめ、大ホールが比較的に多いのですが、紀尾井ホールは、ステージに立ったときにお客様全員との一体感が生まれて歌いやすかったですね。

進藤 設計時に、こうしたホールが多いヨーロッパに担当者が赴き、さまざまなホールを見学し実際にコンサートを聴いて、今の形にたどり着きました。

開館以来四半世紀を経た今日まで、さまざまな演奏家の方から好評価をいただくたびに、苦勞してつくれた甲斐があったなと思います。

山崎 帝劇は2000人ですが、ブロードウェイやロンドンだとミュージカルも500〜600人規模で、そのぐらいの空間が基本的な劇場のつくりとして定着していますね。いつかまた紀尾井ホールでやらせていただきたいと思っています。

進藤 最後に、山崎さんから日本製鉄へのメッセージをいただきたいのですが、特に、悩みながら頑張っている若い世代に向けてエールをいただくと嬉しく思います。

山崎 アメリカでのダンスパーティーのときのように、恐怖を感じる瞬間や、厳しい、辛いと思うところにチャンスがあり、そこで一步を踏み出すことが大切です。僕がメディアの世界に行くとき、他に例がないこともありミュージカル界からは反対の声もありました。でもそれをやらなければ大きな変化はないし、大きなものは生まれません。一步踏み出したことで、朝ドラや大河ドラマ、司会、声優などをやらせていただく機会が生まれて、仕事に広がりが出ました。怖いなど思ったときに勇気を持って行動していただきたいと思っています。それと継続して取り組むことも大事ですね。

進藤 ありがとうございます。壁を飛び越えないと成長はないということですね。本日はミュージカルとの出会いからアメリカでの貴重な経験、新たなジャンルへの挑戦など、山崎さんの人生を垣間見ることができ、日本製鉄社員の励みになると思います。これからも多方面での活躍を期待しています。お忙しいなかお時間をいただきありがとうございます。



進藤会長がパネルの前に日本製鉄音楽賞の歴代受賞者を紹介



対談前に「紀尾井ホール」の洋楽専用ホールを見学